

異文化の理解 (古代インドの場合) 原 実 (18/10/2008)

[I] 言語

梵語 (Sanskrit Language) samskr-ta (洗練、浄化)
俗語 (Prakrit Languages) Pali, Ardhamagadhi...中期インド-アリアン語...
近代インド-アリアン語 (Hindi, Bengali, Marathi, etc.)
言語が洗練浄化の対象となる (Pāṇini 文法学)

[II] インドの名称 (sindhu=Indus River)

「詳夫天竺之称異説糾紛。旧云身毒或曰賢豆。今從正音宜云印度」(大唐西域記卷 2)

- (1) sindhu の対音=身毒、申毒、身篤、辛頭、身豆、信度、信陀、信定
- (2) hindu, hind (上のイラン訛) =賢豆、賢毒、乾篤、乾特、乾竺、県度
- (3) thindhu, tindu (上のビルマ訛) =天竺、天毒、天篤、天豆、天定
- (4) indu, ind (2 のギリシャ訛) =印度、印土

[III] 日本に知られたインド=天竺 (釈迦誕生の理想国)

三国 (天竺、震旦、本朝)「辺土粟散の境」(平家物語)

「震旦ひろしと雖も、五天竺にならぶれば一辺の小国」(神皇正統記)

渡日僧：法顕、玄奘、義浄、新羅の慧超 (往五天竺国伝 727)

【真如親王 (810 菓子の変、862 羅越国) 明恵上人(1173-1233)】

アンジロウ (Goa 1547)、天正少年遣欧使節 (1583<1582-1590)

来日僧：婆羅門僧正菩提遷那 (東大寺大仏開眼供養 752)

インドの神々 (仏教の守護神)：帝釈天、梵天、弁財天、毘沙門天、竜神

[IV] 西洋に知られたインド

歴山大帝(324BC), Megasthenes (305-292), Vasco da Gama (1498),

Sir William Jones (1746-97: 1786) : 印欧語比較言語学

「梵語はその古さがどの様であろうとも、驚くべき構造を有している。それはギリシャ語よりも完全であり、ラテン語よりも豊富である。しかもその何れにも増して精巧である。しかもこの二つの言語とは動詞の語根においても、文法の形式においても偶然造り出されたとは思えない程の顕著な類似を有している」

G.Hegel, Vorlesungen über die Philologie der Geschichte (1837)

「20 数年来の梵語の発見と、梵語とギリシャ語やラテン語などのヨーロッパの言語との繋がり発見は新大陸の発見に比すべき歴史上の大発見である」

H.Heine, Auf Flügeln des Gesanges (1827)

「歌の翼に共に乗り、一緒に行こう恋人よ、
ガンジス川の草原に、二人の憩う場所がある」

F. Max Müller (1823-1900) Oxford University

南条文雄(1849-1927: 1879-1878)、笠原研寿、高楠順次郎、辻直四郎、大地原豊

[V] 異国との接触と理解

応神天皇 16 年、百済の王仁、論語 20 卷、千字文 1 卷) 遣隋使(607-)遣唐使(630-894)

1543 年、南蛮人 (ポルトガル、スペイン) 紅毛人 (オランダ)、通詞

J.A.Kulmus (1689-1745): anatomische Tabellen (Tafel Anatomia)

杉田玄白、前野良沢、中川順庵が千住骨ヶ原腑分けに立会う(1771 年 3 月 4 日)

(五臓六腑) —— 翌日より翻訳開始 (4 年係り)

「国異に言殊なるといへども、同じ人の為すところ、為すべからざるところあらんや」

青木昆陽「和蘭文字略考」732語よりなる日蘭対訳語彙集(1746)
稲村三伯「ハルマ和解」6万語よりなる蘭日辞典(1796)

[VI] 翻訳の可能性と限界 (Outsider が外国文化の Inside へ)

普遍(死、愛、論理学)と特殊(花鳥風月、詩文学、幽玄、道)

[VII] Sanskrit 文学の場合

(I) 語彙

(1-1) 色彩語彙: nīla, śyāma, gaura, hari, kṛṣṇa: indragopa (臙脂虫)

(1-2) 親族名称:

(1-3) 盲 : andha, andha-tara(=blinder), 盲井 (andha-kūpa), 盲鏡 (andha-ādarśa)
盲爪 (andha-nakha)、眼光線 (netra-raśmi)

(II) 表現

(2-1) 熱と冷 : 愛人の膝 (priya-aṅka), 熱涙 (tapta-aśru), 冷涙 (śīta-aśru),

戒 (śīla) 涼 (śītala): 「言尸羅者。是清涼義也。謂惡能熱惱心身」

(2-2) 美女記述 : karabha-uru, (象の鼻の腿)、mṛga-dṛś, mṛga-śava-akṣi (仔鹿の目)

(2-3) 無数 (阿僧祇: asaṃkheya)、恒沙 (gaṅgā-nadī-vāluka)、星 (tāraka)、雨滴 (流) (dhārā)、
塵埃、微塵 (pāṃśu)、葉 (parṇa-patra)、身毛 (roma-kūpa)、瞬間 (akṣi-nimeṣa)

(III) 語彙の多様 : Al Beluni (973-1048)

「インドの言語は独特である。それは梵語を学習してみれば直ぐに判る。何故ならこの言語は、語彙と語尾変化にとつともない多様性を示している故である。のみならず、一つの事柄を表すのに多様な語を用い、又一つの語が実に多くの事柄を意味している。従って一語の意味を正しく理解する為には、多くのそれを修飾している語を頼りに、多くの意味の中から弁別して行かねばならない。一語の意味はそれを取巻く文脈、前後関係を見究めない限りは正確には把握出来ない。インド人は自分達の言語のこのとつともない拮据を自慢しているけれども、それは寧ろ欠点と言うべきである」

(3-1) 太陽 : sūrya, āditya, divakara, bhāskara, saptāśva, pūṣāṇa, virocana, sahasrāṃśu

(3-2) 月 : candra, niśā-kara, niśā-pati, kala-nidhi, mṛgāṅka, śaśa-dhara, himāṃśu

(3-3) 大地 : bhū-mi, acalā, anantā, vasudhā, viśvam-dharā, sarvaṃ-sahā, mahī, pṛthivī,

(3-4) 水 : udaka, toya, jala, payas, vāri, pāṇīya, ambhas, ambu salila, ap (pl.)

(3-5) 樹木 : vṛkṣa, mahī-ruh, śākhin, viṭapin, taru, drumā, pāda-pa, anokahas

(3-6) 鳥 : śakunta, śakuni, patrin, paṃtaga, patra-ratha, aṇḍa-ja, pakṣin, dvija

(3-7) 眼 : akṣi, cakṣus, īkṣaṇa, locana, nayana, netra

(3-8) 象 : ibha, gaja, kareṇu, mataṅga, nāga, hastin, karin, dantin, dvipa, pīlu

(3-9) 愛 : kāma, sneha, rāga, pṛīti, vātsalya, bhakti, maitrī, hārda, sauhrda, praṇaya

[VIII] 結論

(視点の複数化)

「人は幾百種の木々、幾千種の花、幾百種の果物、幾百種の薬草を具えた庭を想像してみるがよい。若しこの庭の庭師が、食べられる有用な物と、食べられない無用な物以外の他の植物上の区別しか知らない場合、彼は庭の10分の9をどうしたらよいか判らないであろう。彼は素晴らしく美しい花を引き抜き、大変貴重な樹木を伐採してしまうであろう」(H.Hesse, Steppenwolf、荒野の狼=高橋健二訳)

(視点の相対化)

「外国語を知らない者は、自国語をも知らない者である」(J.W.von Goethe, Maximen und Reflexionen 1809 格言と反省=高橋健二訳)